

肝動脈注入化学療法におけるカテーテル固定ベルトの考案

キーワード：肝動脈注入化学療法・固定方法・カテーテル固定ベルト・アンケート調査

1 病棟 10 階西

福本花恵 今度真美子 岡村倫子 兵頭紀代美 藤野淑子

I はじめに

当科では進行した肝細胞癌患者の治療法の一つとして皮下埋め込みリザーバーを用いた動注化学療法をおこなっている。治療中 5 日間はニードル針付きカテーテルをリザーバーポートに挿入したままの状態を過ごす。毎回の治療終了後、カテーテルをガーゼで包みテープにて固定を行う。従来の固定方法では下腹部に固定するための動きにくさや、寝衣の着脱時などにテープが外れやすく再固定が必要な場合が多くあり、固定方法を改善する必要があった。

肝動脈注入化学療法（以下、肝動注）用のカテーテル固定用品について調べたところ、現在市販されているものはなく、またそれに関する文献もみあたらなかった。

そこで今回、治療を安心して受けられ、治療生活を安楽に過ごしてもらうためにカテーテル固定ベルト（以下、固定ベルト）の作製を行った。実際に患者に固定ベルトを使用してもらいアンケート調査を行ったので、以下にその経過を報告する。

II 方法

1. 研究対象

1 病棟 10 階西に入院中で下腹部にリザーバーを留置し肝動注を受けた患者で、研究同意を得られた者 7 名とした。

対象者 7 名のうち、男性は 5 名、女性は 2 名であった。対象者の年齢は、40 代 1 名、50 代 1 名、60 代 5 名であった。現在までの肝動注経験回数について 1 回目 2 名、2 回目 2 名、3 回目 2 名、4 回目 1 名であった。

2. 研究期間 平成 18 年 7 月～10 月

3. 倫理的配慮

日本看護協会の看護研究における倫理指針を参考に、対象者に対しプライバシーを固く守ること、途中でも研究協力を辞退できること、得られたデータは研究目的以外では使用しないことなどを口頭で説明し同意を得た。

4. 研究方法

1) 固定ベルトの作製

素材は肌触り、吸湿効果もあることから綿 100%とした。ベルトの長さはメタボリックシンドロームのウエスト周囲径を参考にし（男性 85cm、女性 90cm 以上）、ゆとりをもたせて全長 100cm と 120cm の 2 種類のベルトを作った。またアジャスターの大きさにあわせベルトは幅 3cm とした。ベルトの片端にアジャスターをつけ、患者で調節・着脱ができるようにした。カテーテル収納用の袋については、ウエストからリザーバーポート部までの長さを測定し 1 辺 10cm の袋をつくった。カテーテルの脱落を防ぎ、開閉が簡単にできるように袋の片側にマジックテープを貼った。なお、製作についてはグループメンバーが行った。1 本あたりコストは約 600 円となった。（図 1、写真 1）

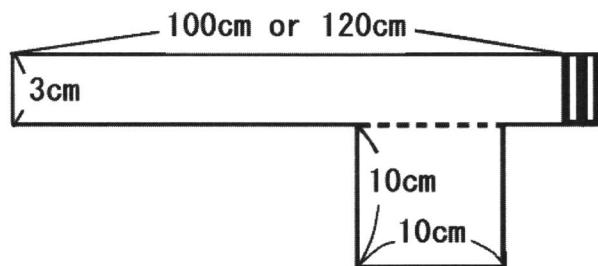


図1 固定ベルト設計図



写真1 固定ベルト装着の様子

2) アンケート調査

当初、従来の方法と比較検討のため、治療開始1週目に従来の固定方法、2週目に固定ベルト、3週目に固定ベルト、4週目に従来の固定方法を行う予定であった。しかし在院日数が短いことや3週目で治療中止となるケースもありデータが十分にとれない状況であった。そこで以下の方法に変更し研究を行った。

治療開始後1週間は従来のガーゼ固定方法でおこない、2週間目に考案した固定用品を使用する。2週間終了後、アンケート調査を行う。

アンケート項目は、従来の固定方法と比較して固定ベルトの「素材」「みため」「大きさ」、また固定ベルトを使用中の「扱いやすさ」「動きやすさ」について5項目とした。評価については0（よくない）1（あまりよくない）2（まあよい）3（よい）の4段階評価とした。

Ⅲ. 結果

考案した固定ベルトについて、「みため」でよいと答えた方は6名、まあよいと答えた方が1名であった。「固定ベルトはガーゼで包む方法に比べてスマートである」との意見もあった。「大きさ」の項目では、よいと答えた方が5名、まあよいと答えた方が2名であった。「みため」「大きさ」についてまあよいと答えていたのはともに女性であった。「素材」について7名全員がよいと答えていた。固定ベルトの着脱時や再固定時の「扱いやすさ」について7名全員がよいと答えていた。「とても便利でよかった」との意見があった。「動きやすさ」の項目ではよいと答えた方が6名、まあよいと答えた方が1名であった。1名より「ウエスト・腹部の落下があった」との意見があった。

肝動注経験回数1回目の2名のうち、対象者Aは、5項目すべてに対しよいと答えていた。一方、対象者Dは「みため」「大きさ」の項目でまあよい、「素材」「扱いやすさ」「動きやすさ」の項目でよいと答えていた。肝動注経験回数2回目の対象者C、Eは、ともに5項目すべてについ

てよいと答えていた。肝動注経験回数3回目の対象者Fは5項目すべてに対しよいと答えていた。一方、対象者Gは「大きさ」「動きやすさ」の項目でまあよい、「みため」「素材」「扱いやすさ」の項目でよいと答えていた。肝動注経験回数4回目の対象者Bは5項目すべてについてよいと答えていた。

男性の対象者5名はすべての項目においてよいと答えていた。一方、女性の対象者2名は「みため」「大きさ」「動きやすさ」の項目でまあよいと答えていた。

対象者	みため	大きさ	素材	扱いやすさ	動きやすさ
A	3	3	3	3	3
B	3	3	3	3	3
C	3	3	3	3	3
D	2	2	3	3	3
E	3	3	3	3	3
F	3	3	3	3	3
G	3	2	3	3	2

表1 アンケート結果

《自由記載より》

- ・とても便利でよかったです。あとは素材がメリヤスカ何かのようなもので腹部に優しく軽くフィットするといいなと思います。使わせていただきます。
- ・袋の部分で両端にマジックテープはどうですか。ウエスト・腹部の落下があるのでウエストを締めると正座するときちょっとだけ難かな。
- ・固定方法では医療者がテープ・ガーゼをはらないといけないため、先生方は固定用品がいいと思う。
- ・この様な物は自分のパテント（特許）にすべし。
- ・固定ベルトはガーゼで包む方法に比べてスマートである。

IV考察

固定ベルトのみためや大きさが評価が低かったのは、いずれも女性の対象者であった。これより女性は男性よりみためを重視している傾向があると考えられる。肝動注経験回数1回目の方で「みため」「大きさ」の項目で評価が低かったが、その要因として初めての治療に対して緊張など、精神的な要因も影響している可能性があると考えられる。

固定ベルトの素材については綿100%で吸湿性に優れ、洗濯可能であり繰り返し使用することもでき対象者の満足度は高かった。しかし、中にはより腹部にフィットする素材を希望された方もいた。治療中、体に素材・みためなど、審美性にもこだわっていく必要があると

対象の年齢も40~60代であり、1回の説明で固定ベルトの使用方法もすぐに理解できていた。治療前後の固定ベルトの着脱やアジャスターによるサイズ調節など患者自身で簡便に取り扱えていたため、「扱いやすさ」の評価が高かったと考えられる。

また従来の固定方法では動きの多い下腹部にテープで貼用するため、自然に脱落することや寝

衣の着脱時に外れやすく慎重に行動しなければならず動きにくさが生じていた。しかし、固定ベルトを使用することでそれらの不安が軽減されたため、動きやすくなり可動性の向上につながったと考えられる。

治療中に収納用の袋よりカテーテルが脱落したという報告はなかったが、1名の対象者から固定ベルトのウエストからの落下がみられたとの指摘があった。治療を安全にうけてもらうために、より腹部にフィットできるように固定ベルトの素材などを検討していく必要がある。毎回治療終了後のカテーテル収納を目的としていたが、カテーテルが直接皮膚に当たることによる疼痛やカテーテルが脱落することへの不安などを軽減するために、治療中も使用されている方もいた。また今回固定ベルトを使用された患者からは、研究終了後や次回の治療時も使用したいという希望が多くあった。

従来の方では毎回の治療終了後に医療者が固定を行っていた。しかし固定ベルトを使用した場合その必要はなく固定に費やす時間を短縮することができた。また従来の方のようにテープやガーゼで刺入部が隠れることもなく、観察も容易に行うことができた。固定ベルトを使用することでケアの簡略化が可能であるため、医者側からも今後も固定ベルトを使用したいという意見が多くきかれた。

V まとめ

- ・ 患者にとって従来の固定方法より考案した固定ベルトの満足度は高かった。
- ・ カテーテル固定ベルトによって固定方法の簡略化、可動性の向上がはかれた。

VI おわりに

今回、固定ベルトの作製に時間をかけてしまい、実際に使用できた事例数は少なかったが、アンケート調査によって固定ベルトの満足度が高いという結果がえられた。今後も継続して固定ベルトを使用し改善をおこない、治療を安全・安楽に受けられるような視点をもって看護の提供に取り組んで行きたい。

参考文献

- 1) 川杉佳子・倉持恵子・小暮かをる：保温効果のあるシャワーマントの作製，第30回成人看護Ⅱ，152-154，1999
- 2) 白石恵子・花田昭子・多治見博子：耳鼻手術後1日目からの洗髪を可能とした洗髪器具の作製と医師への働きかけ，第32回成人看護Ⅰ，181-183，2001
- 3) 神尾聡子・高橋結花・酒井美香ほか：経皮的冠動脈形成術後の圧迫固定用具の検討—エラッテクスと改良した「とめ太くん」の比較から—，第33回成人看護Ⅱ，345-347，2002